捜査班
喫茶きょうまち

成平（なりひら）　一平太（いちへいた）

「あら、先生おはようございます。今日は早いんですね」

喫茶『きょうまち』は毎朝六時半には店を開ける。

店主の京町友香（きょうまちともか）は東京生まれの東京育ち。今は亡き祖父の孝源（こうげん）が警視庁の刑事になることを目指し、千葉からこの地に移り住んで七十年以上になる。終戦直後にこの土地を手に入れたのだと警視庁捜査一課の主任刑事だった父の孝太朗から伝え聞いていた。孝太朗とその妻、聡子との間に産まれた一人娘の友香は、いわゆるチャキチャキの江戸っ子ということになる。その両親もすでに祖父と共に菩提寺の墓地に並んで眠っている。

市ヶ谷の駅にも近く、きょうまちを訪れる客は千差万別であった。もっとも朝の客のほとんどは顔なじみといってもいいほどであった。目当てはモーニングサービスとして一杯のコーヒーに付けている厚目に切ったトーストにゆで卵、自家製のヨーグルト、半分に切ったバナナと野菜サラダの小鉢、さらにビスケットが二枚。朝の常連はこの手厚いサービスを朝食代わりにしていた。

「これで四百円はお得よねー」

近くのビル清掃にやってくるパート仲間の五人が仕事始めの第一声をこのきょうまちで上げるお決まりの台詞だった。いずれも六十歳をとうに越えたご婦人たちだった。

モーニングコーヒーのメッカといわれる名古屋では当たり前のサービスであっても関東ではコーヒーとサービスには別々の料金がメニューに表示されているのが普通だった。

友香には隆智（たかとも）との間に産まれた一人娘の智音（ともね）がいた。隆智も警視庁の捜査一課の主任刑事として辣腕を振るっていた。が、三年前の夏。エルニーニョの影響をまともに受けた暑い昼下がり、京町家にとって最悪の事態がおきた。隆智が担当していた事件が解決し、久し振りの休日を友香と楽しむかのように近くの公園を散歩していた時だった。反対側の歩道から道路に飛び出した幼子を救うために必死のダイビングをした隆智があっけなくこの世を去っていった。T大学の法学部に

通い始めて半年もたたない智音とともに友香は放心状態のような日々を一週間ほど送っていたことがあった。そんな時にたまたまテナントとして貸していた一階の店舗が空いたことから意を決するかのようにきょうまちを開けたのだった。

名古屋出身の隆智が口癖のように言っていたモーニングサービスを店の看板にしたこともあって順調な日々を過してきた。もっともきょうまちを人気店にしたメニューは他にもあった。二センチはあろうかという厚めのトーストにたっぷりと乗せた粒あん。程よく茹でたスパゲティにタマネギのスライスとウインナーソーセージの薄切りをケチャップを絡めながら炒めて熱々のステーキ皿の上に溶き卵を流し、その上に盛り付ける。

小倉トーストとナポリタンの二つは、テレビの取材を受けたこともあるほどの人気メニューだった。どちらも名古屋では喫茶店メニューとしては定番の物だった。

百五十坪ほどの敷地を有する一戸建もいづれは友香が相続することになる。駅まで数分のこの土地を相続ともなればそれなりの税金を納めなければならない。節税対策の意味もあって、亡き父が駅前開発の際に五階建ての京町ビルに建て替えたのだった。もう二十年も前のことになる。ほどなくして同じ警視庁勤務だった隆智との結婚話がもちあがった。友香は一人娘でもあったことから孝太朗がいい顔をしなかった。それでも、隆智を養子に迎えることで折り合いがついたのだった。翌年には智音が産まれ賑やかな二世帯家族ではあったが、智音が五歳のときに孝太朗が、その翌年には聡子が続けてこの世を去って行った。それを機に、友香は警視庁を退官し、子育てに専念することにした。

一階が喫茶「きょうまち」と美容サロン「ビューティ・マリン」。二階が進学塾、三階が生命保険会社。四階が田宮法律事務所と坂家法律事務所。そして小田島調査事務所がテナントとして事務所をかまえていた。五階が友香と智音の居住空間となっていた。もっとも二人だけの居住空間としては余りにも広く、雄のラブラトルレトリバーのビッキーと暮らしている。ビッキーは嘱託警察犬としてその任務をこなしてきたが九歳で引退することになり、本来ならば飼い主のもとに引き取られるはずだったが、飼い主が高齢でもあったことから友香が引き取ることになった。一緒に暮らし始めて一年になる。

「お待ちどうさま。先生、なにか大変なお仕事をお引

き受けになったのですか？」
　田宮弁護士が開店と同時にきょうまちを訪れる時は決まって難解な弁護を引き受けた時に限っていた。
「ありがとう。ちょっと厄介な事件の弁護を引き受けてね・・・」
「そうですか、ではごゆっくり」
　友香は軽く頭を下げ、笑顔を残してカウンターへと戻っていった。
「田宮先生、また難事件を引き受けられたのですか？」
「そうみたいね」
　カウンターの中から小田島美沙子が声を掛けると友香が当たりとばかりに笑顔を送った。
　カウンターの中で客からの注文を手際よくさばく美沙子と四階の小田島調査事務所の所長、小田島祐樹とは夫婦だった。
　小田島祐樹も元は警視庁捜査一課の刑事だった。隆智の下で地道な捜査や危険なことにも真正面から向かって行く敏腕刑事だった。将来を有望視されていた巡査部長だった。が、美沙子と関わったことから退官の道を選び隆智の勧めもあってこの京町ビルに事務所をかまえる事になった。これまでの経験を活かし、弁護士事務所付きの調査事務所として数々の弁護事案における調査を引き受けていた。
　友香が美沙子と始めて会ったのは、小田島が結婚をしたいと隆智に報告するために自宅に訪れてきた時だった。その時の美沙子には少し暗い影を見て取れたが、今はそんな影をみじんも感じ取ることはない。長い髪を髪留めで束ね上げた白いうなじは女の友香さえ見とれてしまうほどに色気を漂わせている。笑顔を忘れることはなく、誰にも優しくことばを交わし、「きょうまちの看板娘ね」と友香が口にすると、「四十歳過ぎてとうの立った看板娘なんてどこにも通用しませんよ」と美沙子が照れていた。
　美沙子には辛い過去があった。高校の卒業式を終え、大学生としての新たな生活に希望を膨らませていたときに交通事故で両親を失い、頼る親戚も無く中学生だった妹の加奈子の母親代わりとして大学を諦め家計を支えた。貧しくても寄り添うかのように暮らし、笑いの絶えない姉妹だった。その妹が高校を卒業しようというときにビルから飛び降りた。両腕からは注射針の跡が幾つも重なり合い、息は途絶えているにもかかわらず悲鳴を上げていた。あれほどに寄り添い生きてきたにもかかわらず美沙子は加奈子の異変に気づいてやることができなかった。誰にも相談できず一人苦しん

だ末、地獄のような毎日から逃れる手段として屋上の柵を越えるしかなかったのかと思うと美沙子はやりきれなかった。加奈子の葬儀を終え、一週間ほどして地元のやくざが警察に逮捕された。加奈子を逃れられない地獄に引きずり込み、欲望を金で買いあさる輩に商品でもあるかのように提供し、自身の糧にしていたと警察からの報告があった。刑事が加奈子の遺影に手を合わせる際の鐘の音に重なるかのように漂う線香の香り。それは、この世の無情さを悲しむかのように小さな部屋の壁に染み込んだ。美沙子の躰にこみ上げる怒りは沸点に達し、冷静さや思慮分別を備えていたはずの美沙子の心が音をたて崩れる瞬間でもあった。

加奈子の人生をもて遊び、美沙子の心を震わせたやくざに下った判決は五年の懲役刑でしかなかった。しかも結果としてわずかに三年での放免となった。世間的には真面目に刑期を勤め、猛省の色が濃いとのことなのかもしれないが美沙子にそれを理解することなどできるはずもない。極刑が下されていたとしても収まらないほどの怒りと悲しみと苦しみが美沙子の背中を押した。八方手を尽くし非情な男の居所を突き止めた美沙子は、包丁の刃先を相手の脇腹に突き刺しその場から走って逃げた。しかし、瀕死の重傷だったとはいえ美沙子の思いは叶うことなく翌朝刊の三面の活字だけが大きく踊った。

凶悪事件として捜査一課、京町班が動くこととなり、一週間ほどで美沙子の犯行であることが突き止められた。美沙子に手錠を掛けた小田島は取り調べを通じて次第に同情の念を押さえる事ができなくなっていった。小田島の書いた調書にはすでに刑期を終えているとはいえ、事件に至る以前の被害者の非情な犯罪が加害者を追い詰めた結果であると付け加えられた。その上で、加害者のこれまでの生活態度と素直に取り調べに応じたことなどから情状酌量の余地ありと追記された。

検事の取り調べを受け、裁判が結審するまでの三ヶ月間を美沙子は拘置所でおくることとなった。新聞の閲覧が許される拘置所生活で美沙子は被害者が退院直後に別の男に刺殺されたと知った。非情な男の餌食となったのは加奈子だけではなかった。

美沙子に下った判決には執行猶予五年の温情が付け加えられた。だからといって前科までもが消えるわけではない。

刑事でありながらも小田島は弁護人の証人として情状酌量を求める供述を裁判官に訴えていた。単なる美沙子への同情からだったのかもしれないが、釈放され

た美沙子を気遣いながらなにかと相談に乗っている内に恋愛感情が募っていった。
二人が揃って結婚の報告に来たのは隆智が他界する一ヶ月ほど前のことだった。刑事が前科のある美沙子と結婚するには退官が前提となる。それでも小田島は躊躇することなく美沙子を選んだ。
「主任。今、抱えている事件が解決したら彼女と結婚することにしました」
「そうか、おまえらしいな」
「小田島さん、美沙子さんおめでとう」
「小田島、退官したら探偵事務所を開いたらどうだ。このビルに小さな部屋だが空きもある」
「そうよ、このビルには弁護士さんが二人もいるから弁護活動に調査活動はつきものよ。敏腕刑事の第二の人生にはうってつけかも。大丈夫。私が橋渡しをしてあげるわよ」
友香と美沙子は忙しく動き回りながらも、二人が揃って京町家を訪問した時のことを時折、話題にしながら笑い声をきょうまちに響かせていた。
「ほらっ、やっぱり。小田島さんが・・・」
店のドアが開いた気配に振り返った友香が小田島に笑みを送りながら美沙子にささやくかのように口にする。
「お待たせしました。先生、難事件ですか？」
弁護士の田宮仙太郎が難事件を引き受けた時は決まって店の一番奥の隅に腰を降ろす。それ以外はカウンター席で友香や美沙子との会話を楽しみながらコーヒーを飲んでいた。
きょうまちの店内は鍵の手のようなカウンター席に六人ほどの客が座れる。カウンターに沿うようにボックス席が四つ並び、さらにその奥にも六つのボックス席が作られている。入り口の席は隣同士の会話が飛ぶほどにオープンな雰囲気が漂う。奥の席はそれぞれが腰よりも高い衝立にソファーがあしらわれている。衝立の上にはさらに鉢植えが並び、腰を上げて除き込まない限り隣の席を探ることはできなくなっていた。
小田島がソファーに腰を下ろすのと同時に水とコーヒーがテーブルに置かれた。
「ありがとう」
小田島が美沙子の顔を見上げるかのように口にしながら微笑んだ。
「いいねー、小田島君家はいつまでたっても鮮度が落ちなくて」
小田島が店に入るのと同時に美沙子がコーヒーを入

れて運んでくる。きょうまち自慢のモーニングは付いていない。
小田島家の朝は、毎日五時には美沙子が朝食を作り始め三十分もすると小田島がキッチンに顔を出す。湯気の立つ味噌汁の香りが向かい合う二人を包むかのように漂い、程よく炊けたとオレンジのランプが告げる炊飯器の釜の蓋を美沙子が開ける。小田島の仕事の都合によっては、まだ暗い内に出かけることもある。そんな時でも美沙子は温かい朝食をと台所に立った。田宮弁護士はそのことを知っていた。
田宮弁護士は弁護を引き受けた仕事に必要な調査は小田島に全てを依頼していた。京町ビルにはもう一人の弁護士、坂家吉之助も事務所をかまえていた。小田島は坂家弁護士からの調査依頼も全て引き受けていた。
二人の弁護士はいずれも六十歳を過ぎており、足だけが頼りの調査をこなすには限界もあり、クライアントの要求に応えられずに他の弁護士を紹介することもあった。そうした事情を知っていた大家でもある友香が二人と、警視庁を退官した小田島を引き合わせ、小田島調査事務所を開設することになった。
「それで田宮先生、弁護の依頼内容は？」
小田島は、コーヒーカップに一度だけ口を付けると本題へと入っていった。
田宮弁護士が受けた弁護の依頼は困難を極めるもので有ることは、唇に力が入り真一文字になっていることから小田島には容易に想像できた。
弁護の依頼は被告人、工藤敏也の妻綾子によるものだった。事件の概要は、被告人の上司服部昭雄を柳刃包丁によって刺殺させたとする殺人罪であった。被告人は日頃より被害者からパワーハラスメントを受け、積もり積もったストレスから犯行に及んだものとの検察の調書には書かれていた。しかし、工藤敏也は一貫して、妻の綾子と事件のあった夜は一緒に自宅で寛いでいたと主張している。妻の綾子も同様のアリバイを主張してはいるものの妻の証言だけではアリバイとして認められることはなかった。さらに、状況証拠として被告人の向かいに住む大学受験生の鳥谷祥吾が夜の九時過ぎに黄色いパーカーを着て出かけるのを目撃したと証言している。殺害現場である公園までは徒歩で二十五分ほどであり、途中のコンビニの防犯カメラに被告人が歩いて通り過ぎて行く姿が映っていた。物的証拠としては公園出口の茂みの中から発見された凶器に被告人の指紋が付いていたことが決定的とされた。
「厳しいですね。それで先生はどのように？　減刑を

求めるための弁護を・・」
　小田島には田宮弁護士の弁護方針は被告人の無罪であり減刑などでは無いことは十分にわかってはいたが確かめずにはいられなかった。確かな動機、目撃証言に防犯カメラに映る被告。さらには発見された凶器に付着していた指紋は被告人工藤敏也のものである。小田島も元は警視庁捜査一課の刑事である。事件の内容と犯人逮捕の経緯を聞けば小田島も被告人に手錠を掛けていたに違いなかった。
「勿論、冤罪を主張する。依頼人の妻自らが被告人のアリバイを主張している。これほど確かな事はない。被告人は百パーセント無罪だ」
　田宮弁護士も難しい弁護になることは覚悟していた。普通に考えれば無罪を勝ち取る見込みなどゼロに近かった。いや、限りなくゼロとしか考えられない。それでも田宮弁護士は、「奥さん、減刑を求める方針にしませんか？」とは言えなかった。それほどに依頼人の目が必死に被告人の無罪を訴えていた。何故、妻の証言では証拠とはならないのか。妻であるがために証言としての能力を切り捨ててしまうのかと。
「じゃあ先生。今から被害者と被告人との人間関係がどうであったか聞いてきます。それから、被害者宅のお向かいさん、公園までの地取り、現場の確認に」
　すっかり冷めてしまったコーヒーではあったが、小田島は全てを飲み干し席を立った。
「ご苦労だが宜しくたのみます」
　田宮弁護士は軽く右手を上げて小田島に期待を込めたエールを送った。
「あら、小田島さんお仕事？　私にもできることがあったらお手伝いさせてね」
　小田島がきょうまちの扉を押し開けると朝の散歩から帰った智音が店先に設けられたリードフックにビッキーをつなげ、深目のさらに水をたっぷりと注ぎながら口にした。
「よしっ」
　智音が声を発しない限りビッキーはおすわりの姿勢をいつまでも続けている。舌を皿の中にくぐらせ美味そうに水を飲むビッキーの頭をなぜながら小田島は、「ああ、その時はお願いするよ」と、言い残し駅へと向かって歩き出した。
　将来は法曹界に身を置きたいと希望を抱く智音はＴ大学の法学部に通いながら実施勉強を兼ねて小田島の手伝いや二人の弁護士の書類整理などを手伝っていた。すでに司法予備試験に合格し、受験資格を手に入れた

智音は、翌年に実施される司法試験をT大現役としての合格を狙っている。
「美沙子さん、おはようございます」
「智音さんビッキーのお散歩ごくろうさま」
智音は店に入るなりカウンター席に座り、出されたおしぼりで手を拭くやいなや一緒に出されたコップの水を一気に飲んだ。
「はい、おまちどうさま」
モーニング用の厚めのトースト二枚が皿の上に乗せられて智音の前に置かれた。
「美沙子さん、小田島さん聞き込み調査？」
どんな事件にも興味を持つ智音の食指が動いた。それに応えるかのように美沙子の視線が店の奥へと投げられた。智音は急いで二枚のトーストを胃の中に押し込みコーヒーカップを手に持って奥の席へと移動した。
「田宮先生、おはようございます」
「おお、智音君かー。おはよう。いま、散歩を済ませたのかい」
「先生、新しい依頼ですか？」
智音は田宮弁護士の問いに応えることなく依頼の内容を聞きたいとばかりに席に腰を降ろした。
「ふむー。まあいいだろう。智音君は小田島君の助手でもあり、我が弁護士事務所の助手でもある。本来、弁護士は守秘義務があって・・・」
「ありがとうございます。それで依頼の内容は？」
智音は焦れるかのように田宮弁護士の前置きを遮って本題をと急かすかのように口にした。
「難解な事実がいくつもあるわね。どれも被告が真犯人だと示す物ばかりね。これを一つ一つ崩していくなんて・・・。いや、奥さんが事件当夜の被告は一歩も家を出てはいないとアリバイを主張してるのよね。これほど確かなことは無いのに・・・」
事件のあらましを聞いた智音は両手のひらで顔を覆いそのままうなだれ次のことばを発することができなかった。
「小田島君が帰ってきたら作戦会議だ、智音君も同席するかね？」
「勿論！」
「但し、報酬は無いよ。ボランティアだ」
「わかってます。将来に備えての勉強のつもりでこの難題を先生とともに頑張ります」
「感心するね。在学中に司法試験合格をめざそうなんて、智音君は天才肌だ。大いに期待しているからね」
田宮弁護士は心の底から智音に感心をしていた。

幼いころから父親の刑事としての活躍を目の前にしてきた。隆智が係わった事件について家庭の中に持ち込む事は無かったものの朝夕に訪れる幾多の新聞記者がいやがおうにも生臭さを放つ。智音は敏感に事件の流れを察知し、推理してゆく癖が付いていた。必然的に将来の進路として警視庁を目指すようにもなって行った。もっとも智音は、末端の警察官ではなくキャリア組に挑戦できるだけの学力を備えていた。そしてその夢はいつしか法曹界へと変わりつつあった。

夕刻の五時を少し廻ったところで小田島が田宮弁護士事務所に帰ってきた。

「お疲れさまでした」

田宮弁護士よりも早く智音が小田島を労った。

「やっぱり。智音さんが待ち構えていると思った」

小田島は智音をさん付けで呼んでいた。隆智が交通事故で亡くなるまでは「智音ちゃん」だったが未成年ではあってもこれからは一人の女性として強く生きて欲しいとの願いを込めてさん付けへと変えた。

「早速で悪いが話を聞こうか」

小田島は被告人工藤敏也と被害者服部昭雄が務めていたM商事を訪ね聞き取り調査をしてきた。ここで得た、それぞれの人となりや日頃の様子などから報告を始めた。

M商事は社員数百名ほどの会社ではあった。戦後の混乱期に先代が立ち上げ、大手工作機械の取り次ぎ代理店として中小の製造会社を相手に揺るぎない地盤を築いていた。二人は営業部に籍を置き、工藤敏也は営業主任、服部昭雄は営業部長の肩書きとの事だった。共にやり手の営業マンとやり手の上司として社長の受けは良かったらしく、その二人が同時に欠けたM商事は業績が落ち込み始めているとの事だった。もっとも、やり手を裏返せば猪突猛進型であり、しばしば二人が衝突している光景が営業部内では見られていたらしい。

被告人は主任の肩書きであり、直属上司である係長や課長にとっては、それが面白くは無かったに違いないとの思いを抱く社員の存在があったことを小田島が聞き込んできた。その社員によれば『確かに二人の激しく言い争う姿は危うさを伴うこともあり、しばしば係長や課長が工藤主任を強引なまでに引き戻すこともあったが、工藤主任の手腕を部長は誰よりも買っていた節が見られた。現に工藤主任を主任に引き上げたのは服部部長だったし、今の営業課を一課と二課に分け工藤主任を課長にという噂さえあったが今はその話も立ち消えに・・・』と、嘆いていました。

「警察もその情報は得ていますよね」
智音の言いたいのは、なぜそんな二人の間に殺人事件に発展するほどの動機に結びつくのかとの疑問だった。被告人にとって被害者は自分を引き上げてくれる恩人といっても良いくらいのはずだと。
「確かに自分もそうは思うのですが・・・。別の証言では二人が激しく言い争いのあと、仕事帰りの居酒屋で『あの野郎、今に葬ってやる』って、よく荒れていたそうです」
「葬るですか・・・。殺してやるとは違うんですね」
「そうです。葬るです」
田宮弁護士は被告人の言葉に興味を抱いた。
「被告人の自宅の向いの受験生にも直接話を聞くことができましたが間違いなく九時過ぎに自宅を出る被告人を見たと・・・」
小田島はこの受検生の証言は大きな壁になる印象を抱いたと付け加えた。
「・・・。コンビニの防犯カメラに店の前を公園に向かって歩く被告人が映っていると警察から聞いています。裁判の前に取り調べ時の調書を始めとした証拠類の開示を裁判所に請求しよう。不思議なのは何故、犯行後の被告人が防犯カメラに映っていないかです。計画的な犯行なら行きも帰りもカメラの無い道を選ぶはずでしょうし、衝動的犯行なら帰り道にも映るはず。柳刃を所持していたのだから普通は計画的犯行と捉えますね・・・」
田宮弁護士は「さて、どこから切り込むか・・・」と言葉を付け加えたかったものの飲み込むかのように喉仏が大きく動いた。
「そこですよね。検事だってそれくらいのことは考えますよね。素人の私だって疑問符を付けますよ」
智音が発した疑問に田宮弁護士も小田島も黙りこくった。
「コーヒーが入りましたよ」
友香が湯気の立つコーヒー四つをトレンチに乗せて事務所のドアを開けた。
「おっ、ビッキーおまえも来たか」
友香の後についてビッキーが尻尾を優雅に振りながら事務所に入ると智音の隣に座り、目を輝かすかのように田宮弁護士に視線を送り『わん』と一声上げた。
「田宮法律事務所の主要どころが揃ったところでもう一度事件を整理してみよう」
田宮法律事務所にはもう一人、女の事務員がいたが直接事件に係わるようなこともなく雑務のほかに、ひ

たすら事務と接客のみを仕事とし、家庭優先の九時から四時までのパート勤務だった。
田宮弁護士が事件のあらましを述べたが、誰もが何も発しない。それぞれが頭の中で何度も何度も同じ事を繰り返し自問自答していた。事務所の中に漂う重い空気をビッキーの息づかいだけがかろうじて支えていた。
「誰が真犯人であろうと計画的な犯行。それも練りに練った。なぜ、家の中に居た被告人を玄関から出かける姿として目撃できたのか。ご丁寧に犯行現場に向かう姿までもが防犯カメラに。しかも犯行に使われた凶器に被告人の指紋。公園までの距離は被告人の家から徒歩で三十分ほど。被害者がなぜ殺害現場となった公園にわざわざ来たのか。被害者の自宅は電車でしかも乗り換えをしなくてはいけない距離にあり、会社やその関係取引先からも地理的に立ち寄ったと考えるには無理がある。どう見ても呼び出されたとしか考えられない。誰が、どうやって…」
今ある情報だけで被告人の無罪を勝ち取ることはできないとばかりに、後から参加した友香が事件を整理するかのように口にした。
「第一回公判までには、まだ三週間ほどある。明日、もう一度拘置所に出向いて依頼人に接見してくる。小田島君も同席してくれ。特に凶器に何故指紋が付いたかだ。きっとどこかで誰かに知らないうちに握らされたとしか考えられない。それに被害者の家族にも会ってみたい。何か違う事柄が発見できるかもしれない」
田宮弁護士が「今日はこれまで」とばかりに一日を締めるかのように口にした。
「先生。私は明日、目撃者の受験生にもう一度話を聞いてきます。人が違えば何か新しいことを想いだしてくれるかも知れません」
いつものことではあったが智音はすでにこの事件にのめり込んでいた。
「智音君それは良いが、大学の方はいいのか？」
「先生。私はこう見えても優秀な生徒よ。それに明日のゼミは三時には終わるし、その後に…」
智音の頭の中にはすでに目撃者である受験生と向き合っている自分の姿があった。
「そうか、じゃあ何か新しい発見があることを願って今夜は解散。お疲れ様」
今はまだ、何かを期待できる段階では無いことはここにいる誰もがわかっていた。それでも被告人の主張する無罪を確かな物にする何かを見つけ出さなければ

ならない。それは砂山の砂の小さな粒子を一粒づつ丹念に観察するかのような作業かもしれない。だが、必ず何かが潜んでいる。それを見つけ出すのが今回の仕事だとの思いを誰もが共有していた。

「ビッキー、おうちに帰ろー。お腹すいたよね？」

翌朝、一番での接見をと田宮弁護士は小田島の運転で東京拘置所へと向かった。

「先生、何度も申し上げますが本当に私は家内と自宅で寛いでいたんです。私は無実です」

工藤敏也との接見は今日で三回目となる。そのたびに被告人が田宮弁護士に涙目で訴えた。

妻の綾子が弁護士事務所の扉を開けたのは田宮法律事務所が三軒目ですと開口一番に涙目で懇願してきた。誰もが事件のあらましを話すと弁護方針を減刑に絞って挑むことを進めた。動機があり、証人と防犯カメラ。さらに凶器の指紋さえも犯人は工藤敏也だと指している。無罪など勝ち得るはずの無い戦いに多くの時間を割くことを他の弁護士は渋った。しかし、依頼者の目指すところは無罪を勝ち取ることだった。

民事事件に比べて刑事事件は報酬において割が合わない。弁護士なら誰もが知っている。田宮弁護士もこれまでは今よりも大きな事務所をかまえ、若い弁護士を数人従えての民事中心の弁護活動をしてきたが六十歳を機に後身に事務所を譲り、自身は京町ビルに事務所を移し、パート事務員と刑事事件専門に細々と事務所を維持している。そんな田宮弁護士の存在を他の弁護士が綾子に耳打ちしたのかもしれない。

事件のあらましを聞けば誰もが同じ弁護方針を口にするであろうほどに勝ち目の無い戦いであることを覚悟しなければ成らない。田宮弁護士は引き受ける前に工藤敏也の目を見たいと綾子と拘置所に出かけた。

「わかりました。一緒に無罪を勝ち取りましょう」

分厚いガラスを挟んで、三人が決意を新たにしたことを田宮弁護士は思い浮かべていた。

「工藤さん、もう一度ききます。柳刃を手にした覚えは全く無いのですか？　どこかで触ったか、触らされたとしか考えられないのですが・・・」

「本当に覚えがないのです」

「そうですか、何度でも来ますので思いだしてください。ここをクリアーしないと前に進みようがありません。焦らずゆっくりと振り返って見てください。今は指紋が新しいものか古い物かも鑑定できます。ここ一ヶ月くらいにおける出来事の中になります」

犯行に使われた凶器は真新しい物で犯人と目された

工藤敏也の指紋しか残されていない。疑問を挟む余地のないほどにしっかりと残されていた。取り調べの刑事も凶器の入手経路をしつこく問い質そうと机を叩いたり大声を上げて威圧するかのような取り調べが続いた。しかし、工藤敏也にしてみればそもそも犯人に仕立てられたのであって真犯人ではない。答えようの無い質問だった。いや、凶器の件だけではない。刑事が問う全ての事柄に応えようがなかった。送検されてからの検事の問いとても同様だった。

「私はやっていない。だから応えようがない」

幾度聞かれようが同じことしか口にできない。結果として工藤敏也の心証は刑事からも検事からも最悪なものとなっていた。

夕方の六時には昨日と同じメンバーが田宮弁護士の事務所に顔を揃えた。ビッキーも智音の脇におとなしく伏せている。

「さて、私の方は特に新しく報告することは無かった。被害者の奥さんにも会ってきたが特には・・・ 依頼人には、やってないことはやっていないと正々堂々と主張すればいいと伝えてきた」

田宮弁護士も小田島も顔の精気が薄い。どうして凶器に依頼人の指紋が付いたのかを解明するには本人が何かを思い出さない限り前に進めようもない。ただひたすら待つしかなかった。

「私の方も特には。目撃証人の浪人生の部屋から依頼人の玄関は良く見える位置にあるし、嘘を言っているようにも思えなかった。嘘の証言をしなければならない理由も無いだろうし・・・」

それにしてもどうすれば難題解明の糸口を探し出せるのだろうか。誰もが押し黙ったままだった。

「ねえ先生。凶器に指紋が付くには本人がそれを握らない限りは付きませんよね」

「そらそうよ、お母さん決まっているじゃない」

「でも、本人にその覚えは無い」

「それは、本人の知らない内に真犯人に握らされたってことよね」

「そうなるわね」

「それが可能なのは・・・ 被告人が酩酊していたか眠っていた。もしくは、どこかで料理を作った。もしくは、包丁と知らないで握ったってことよね、お母さん」

「そこなのよ。酩酊はわかるけど凶器と知らないでって、そんなことあるのかしら・・・」

「例えば太鼓のバチに見えるかのように細工をした物だったとか・・・」

重要な事が見えないまま隠れていることへの歯がゆさを感じながら友香と智音が思いのままに推理する。
「よし、その線でもう一度明日の朝一番で依頼人に記憶をたどってもらうことにしよう」
ここであれこれと推論を並べても前には進めない。もう一度、酩酊したような記憶や、調理や太鼓のバチなどそれらしい物を触った記憶の有無を確認するしか無いと田宮弁護士が口にすることで今日の報告会を終わらせることにした。
「私はもう一度お向かいさんを夜の九時に訪ねて、窓から依頼人の玄関を見てみるわ。小田島さんもお願い。依頼人と同じように玄関先から外出するところをやってみて」
「わかった。明日の天気も犯行当夜と同じような天気だろうから。自分は、それまでに現場検証をもう一度。それと、コンビニの防犯カメラの映像も地検に出かけて確認してくることに。」
「宜しく頼む。地検には私から連絡をしておくことに。とにもかくにも証拠を崩せなければこの裁判で無罪を勝ち取ることはできない。さらに心証を悪くすることになる。必ず表に出ていない何かが有る」
田宮弁護士の物意には力が込められていた。
「そうよね、頑張りましょう。小田島さん、私も地検に一緒にいくわ。お店は美沙子さんに任せておけば安心。地検なんて何年ぶりかしら」
お店にじっとはしていられないとばかりに友香が口にした。
「お母さん、遊びじゃないのよ。そんな楽しそうな顔をしないで」
「えっ、そんなに楽しそうな顔をしてる？」
「ワン」
「ほら、ビッキーだって」
田宮弁護士も小田島も笑いをこらえるかのようにうつむいた。
友香は両親の他界を機に警視庁を退官していらい事件に関わることを避けてきた。隆智も生臭い話を家庭に持ち込むと事は無かった。祖父も父も警視庁の刑事であり、常に事件を追っている後姿を見て育ったこともあり友香も何時しか刑事になっていた。犯人を送検する都度、友香が地検に足を運んだ。担当検事に送致書を手渡す瞬間が友香に取ってもっとも高揚する瞬間でもあった。難事件であればあるほどその高揚感を強く感じることを知っていた。
京町ビルに二つの弁護士事務所がテナントとして入

居している。出前の依頼があればコーヒーを持ってその扉を開ける。だからといって、弁護士が受けた依頼内容に介入することも無ければ依頼人が持ち込む相談に耳を立てることもなかった。

一方、智音は法曹界を目指すと決めたことを境に二つの弁護士事務所を勉強の場として訪れるようになった。そして、いつしかその回数が増えていった。もっとも、血筋なのか民事を専門とする坂家法律事務所に比べて刑事専門の田宮弁護士の事務所の扉を開ける回数の方が圧倒的に多い智音に友香は目を細めていた。

担当検事の部屋のドアを開けると若い検事と友香が刑事をしていた頃の馴染みの検事が待ち構えていたかのように二人に視線を投げてきた。どうやら弁護側の動きの手の内を見極める補佐として、ベテラン検事が同席していることは明白だった。

地検に保管されていたコンビニのビデオに映っていた被告人はM商事と大きくロゴの入ったフード付きの黄色のブルゾンを身につけていた。顔がハッキリと確認できる角度ではなかったが背格好は被告人に似ているようにも見えなくはなかった。が、どうしてこの不確かな映像が証拠とされたのかは疑問が残った。

「犯行を終えた被告人が自宅に帰る時の映像は見つかっていないの？」

友香の胸に抱いた疑問は単純だった。行きが有れば帰りが有るはずなのにどうしてそれは見つけ出すことができなかったのか。捜査員は当然のようにあらゆる道順で防犯カメラを探したはずである。この事件はどう見ても計画的な犯行でしかない。真新しい柳刃を用意し、わざわざ被害者を公園に呼び出しての犯行で有るにもかかわらず防犯カメラに犯行現場に向かう姿を残すミスを犯している。

「きっと被告人は警戒して防犯カメラの無い道を選んで自宅に帰ったのでしょう。帰りの映像が見つからなくても不思議はない」

検事であろうが刑事であろうが一つの事件に対しての思いは弁護士と大きな違いはない。誰もが真実を求めて必死の思いで向き合っている。違うのは方向性である。立件する側は、容疑者が絞られれば容疑者が真犯人で有るがための証拠固めに奔走する。弁護士はその真逆の真実を求めて奔走する。

「そこなのよね、真犯人の心境に矛盾を感じるのよ」

「京町さん、私の立場はいかに田宮弁護士の代理とはいえ事件とは何ら関係の無い民間人のあなたに証拠のビデオを見せなければならない義務はない。昔のよし

みで小田島さんの帯同を認めたに過ぎない。あなたにあれこれ言われたくはない」
　友香が警視庁に務めていたときの顔なじみの検事ではあったが、証拠にケチをつけられたとの思いを顔に出しての物意となっていた。
「検事、凶器に残されていた指紋ですが握り具合というか握り位置や方向性に何か特徴的なことは見当たらなかったのでしょうか？」
　小田島が、友香と検事とのやりとりを遮るかのように凶器に視線を送りながら意見を求めた。凶器に付いた指紋が着色されているわけではない。凶器をどのように握っていたがわかればとの思いだった。
「使われた凶器を被告人が握ったとの確かな指紋が検出された。これ以上、確かな証拠はないでしょう。あとは裁判で…。あなた方の立場は理解しますが工藤敏也が真犯人であることは疑いようがありません。頑張ってください」
　もう、いいだろう。早く帰れとの裏返しとも言えるかのような嫌みなエールを口にして、検事は二人をドアの方へと押し出すかのような仕草をしながら苦虫を潰した。
「なんなの、あの検事。昔はもっと話のわかる奴だったのに」
　友香は検事室のドアを閉めるのと同時に憤慨したかのように口をとがらせた。
「友香さん、怒ってもしょうがありませんよ。この事件は状況証拠も物証も揃っている。本人が無実だと言ってはいるが簡単な事件だと検察は考えている。だからあの若い検事に勉強の積もりで担当させてるのでしょうから」
　小田島も元は刑事だった。幾人もの検事と事件を通して付き合ってきた。捜査検事が取り調べを担当し、公判検事が裁判時に法廷に立つことになる。今回の事件は確かな動機があり、目撃者と凶器に付着していた指紋という確かな証拠もあると検察は高をくくっているかのようにも思える。被告人が申し立てているアリバイなど端っから無視を決め込んでいると小田島には思えた。
「小田島さん、所轄を訪ねましょう。あそこの鑑識には知り合いがいるのよ。さっきの疑問を投げてみましょうよ」
　友香にも小田島が抱いている疑問が理解できていた。防犯カメラに映っていたとされている被告人は鞄を提げているわけではなかった。とすれば凶器の柳刃は懐

に抱いていたことになる。左手をくの字に曲げてブルゾンを押さえていたように見えた。裸の柳刃を懐に隠すとは思えない。少なくても刃の部分はタオルか何かで包むなり巻き付けていたと考えるのが自然だ。とすれば柄の部分に付く犯人の指紋は握り直したかのような跡が残るはずである。指紋がどのように残されていたのかが大きな関心ごととして膨らんだ小田島なりの検事への問いかけだった。友香は所轄に着くと小田島を車に待たせ、受付に声を掛けて鑑識の長田洋二巡査部長に面会を求めた。

「勘弁してくださいよ京町さん。昔ならいざ知らず今の京町さんは民間人ですよ。事件に関わることなんか話せるわけないじゃないですか」

長田巡査部長は両手を顔の前で合わせ、友香を拝むかのように辺りを気にしながら小さな声で口にした。

「あら、いいの？。長田君がまだ交番勤務のころ交通課の悦っちゃんと勤務中にコソコソと会っていたこと黙っていてあげたでしょ。だから無事にゴールインできたんじゃなかったのかしら」

「そんなあ、もう二十年近くも前の話、とっくに時効ですよ」

友香も昔の話を持ち出して捜査情報を聞き出せるなどとは思ってはいない。

長田巡査部長が所轄の鑑識課に異動となる前、殺人現場で警視庁の主任刑事だった隆智と同じ事件を担当したことがあった。その際に長田巡査部長が名古屋の出身で、しかも隆智と同じ高校の後輩であることがわかり、年に一度は夫婦で京町家を訪れるようになっていた。もっとも隆智の葬儀後は京町家を訪れるというよりは、年に数度ではあったが夫婦できょうまちのコーヒーを飲みにきては友香と悦子の昔話に長田巡査部長が割って入るようになっていた。

「とにかくお願い、どうしても指紋の付き方が気になるの」

友香も負けじと長田巡査部長を拝むかのように手を合わせ懇願するしかなかった。

「しょうがないなあー、独り言ですからね」

長田巡査部長は壁の方に向きを変え、交通安全ポスターの婦人警官の笑顔にボソボソと話を始めた。そして、確かに柳刃の柄に付いていた指紋に疑問を抱いたと明かしてくれた。

「小田島さん、面白い話が聞けたわ。裁判で明らかにすれば依頼人にとって有利な証拠にもなり得ると思うわ」

その日の五時過ぎ、智音が大学から帰って来るのを待っていたかのように田宮弁護士事務所に四人と一匹が顔を揃えた。
「やはり凶器に付いていた指紋は犯行時に付いたものではないと確信したわ」
友香は、長田巡査部長の独り言を一刻も早く話したいとばかりに口にした。
「凶器に付いていた指紋は確かに柄を握った状態での依頼人の指紋であることは間違い無かったわ。ただ不思議なのは付着指紋の状態だと刃の角度も不自然だし握り直したような痕跡も無かったことに鑑識は疑問を持ったようなの。真新しい柳刃を箱から出すときにも指紋は付くでしょうし、懐に忍ばす時にも、指紋は付いたはずだと。しかし、捜査会議ではそこは不問にされたらしく物的証拠が出たと沸いたらしいわ」
「私も友香さんからその話を聞いて誰かに握らされたとの確信を持ちました」
「確かに不自然だね。新品の柳刃だから第三者の指紋が付いていないのは理解できる。商品としてきれいに拭いて箱に入れられ店に並ぶ。それを買った真犯人は手袋をして箱から取り出し、鞄か何かに忍ばせて依頼人に握らせ再びしまい込む。犯行時には手袋をして犯行に及んだ。だから一回握っただけの指紋しか残らなかった」
田宮弁護士は友香が仕入れてきた情報を確認するかのようにゆっくりとかみ砕きながら口にした。
「普通はこうよね」
智音が田宮弁護士の机上においてあったペティナイフを手にして人を刺す仕草をまねながら自分自身が納得したいとばかりに口にした。
もちろん、人を切りつけたり殺傷などしたことのない智音ではあったが、ペティナイフの刃の向きは真上か真下を向いている。テレビの事件ものなどではまれにあばら骨に刃が当たるのを防ぐために真横に刃を寝かせる場合もあるとは聞いていたが、今回の事件は左脇腹に深く一刺しだから真犯人は右利き。依頼人も右利きではあるが、わざわざ刃の向きを斜めにしていることに疑問符が付いていた。
「警察の主張は、計画的な犯行ではあるがいざ実行となった瞬間にゆとりがなく刃の向きまでは意識できなかった。だから、凶器の指紋が斜めでも一回の握り跡でも不思議はない。と、いうことらしい」
田宮弁護士が警察や捜査検事から聞き取ってきたことを口にしながらも納得仕切れていないとばかりに話

しを続けた。
「真犯人と決めつけてしまうと、少しの疑問にも蓋をしてしまう。冤罪を生むかもしれないという危機感が感じられない。その分、我々弁護士が頑張らねば」
「そもそも相当の覚悟と憎しみが無ければあれほどに深い傷を負わすことはできない。ゆとりがなかったなどとは疑問を打ち消すためのごまかしとしか思えない」
小田島の意見を裏付けたいとばかりに智音が駆け足できょうまちの調理場からパン切り包丁を手にして戻ると刃先にタオルを巻き付けた。
「柳刃包丁の刃渡りは二十センチ、柄の長さは十二センチ。このパン切り包丁とほぼ同じ。裸のままで懐に忍ばせたとは到底思えない。下手をすれば自分自身が傷つくことになる。このように刃の部分にはタオルが巻かれていたと思うわ」
智音は、パン切り包丁の刃部にタオルを巻いて差し出した。
「智音さん、決めつけは良くない。タオルではなく何かを巻き付けていた」
「そうね、小田島さんの言うとおり決めつけは良くないわね」
智音は自身の言葉を訂正し、話を続けた。
「真犯人が懐から、いや、決めつけは良くないわね。訂正するわ。懐もしくは鞄や袋から凶器を出したときにはまだタオルなどで刃が隠れていたと考えるのが普通よね。とすれば、凶器を箱から出す際に付いた指紋。タオルを巻いて懐か鞄に入れ、さらに取り出した時の指紋、刃の向きを被害者に向ける際に握り変えた時の指紋の四通りの指紋があってもおかしくはないわ」
「確かにそうよね。四回はともかく一回ってことはないわね。そもそも、犯行時だけの指紋はおかしすぎるわね。計画的な犯行を匂わせながら、いざ実行という瞬間だけ動転して指紋を残すなんて考えられない」
友香が智音の推理に賛同した。
「そうよ。凶器が犯行現場近くの茂みの中というのもわざとらしく思えるわよ。この事件を担当した捜査班の刑事たちの頭の悪さは救いようがないわね」
「智音さん、決めつけはよくないよ。彼らも多くの事件を抱えながら毎日頑張っているんだから」
「そうよね。ごめんなさい小田島さん。優秀な日本の警察を否定するのはよくないわよね」
小田島の本心も智音と同じだった。しかし、何年か前までは小田島自身が刑事として捜査の最前線に立っていた。物証が出たときの捜査員に湧き上がる感情の

大きさも理解できるだけに複雑な思いだった。
「さあ、そろそろお向かいさんに出かけましょうか」
「まって、私も同行する」
田宮弁護士が腰を上げながら口にした。
「えっ、大丈夫ですよ。私と小田島さんで」
「いや、私は依頼者の奥さんにもう一度話を聞きたい。本人は記憶がないと言っていても奥さんなら何か思い当たることがあるかもしれない」
今夜の天気は事件の起きた日によく似ていた。半分ほどに欠けた月ではあったが、街灯の灯りと合わせればまだまだ明るい。依頼人の玄関前も公園に向かう道も昼間のようにはいかないまでも、歩く人の顔の判別をするのに支障があるとは思えないほどの照度を保っていた。
智音には二度目の訪問ではあったが、快く依頼人の向いに住む住人の了解を得ることがでた。早々に、浪人生の部屋の窓から外へと視線を落とした。
依頼人の家の玄関の灯りは消されていたが、部屋の灯りがガラスを通してほんのりと溢れている。月と道路に設置された防犯灯に守られているかのように依頼人の玄関先はことのほか明るかった。
「じゃあ、始めてください」
智音が携帯電話で小田島に合図を送ると、小田島は依頼人の玄関扉を開け、自然体で門の扉を押し出し道路へと出た。
「どうでしか？　あんな感じでしたか？」
智音は依頼人が犯行時間近くに公園の方へと出かける被告人の目撃証言者である受験生に問いかけた。
受験生の両親が心配そうに息子の発する言葉を待った。
「時間は九時五分でした。常に時間を意識しながら受験勉強をしているので間違いありません。でも僕が見たのは玄関から出てくる姿ではなく門扉を押し躰がすでに外に出た状態でした。顔までがハッキリと見えたわけではありません。フードをかぶっていたし、そっぽを向いたような状態でしたから。でも黄色いブルゾンはいつもランニングをしている時に着ていたものと同じでした。大きく会社のロゴが背中に」
「ありがとう、祥吾君。もう少しお願い。今から色々の角度に顔や躰を変えながら門扉を開けて公園の方に向かって歩くから、祥吾君が見た時にもっとも近いのを教えて」
友香は小田島に祥吾から聞いた内容を伝え、幾通りかの門扉からの出方や顔の方向を変えては再現して欲

しいと頼んだ。
「これ、これです。こんな感じでした」
興奮したかのように祥吾の目が輝いた。
「そう、ありがとう。もう一度いい？」
友香は小田島に今の動きをもう一度再現して欲しいと連絡を入れた。
「毎違いないと思います。こんな感じでした」
「ありがとう。もう一つ聞きたいのだけれど、机に目を落としていた祥吾君が窓の外に視線を向けたのはなぜ？　偶然？」
「いえ、外で何か大きな音が・・・。植木鉢か何かが落ちるような音がしたのでつい」
「そお、勉強に集中している祥吾君が気になったほどだからよほどの音ね」
「私たちにも聞こえたわ。そお、植木鉢が落ちたような音だったわ」
「そうですか、ご両親はどちらの部屋に？」
「私はリビングで家計簿を、主人は新聞を読んでいたとき。でも一度だけだったから猫が植木鉢でもひっくり返したぐらいにしか思わなかったわ。ねえ、あなた」
「そうだったね。泥棒が入るにはまだ早い時間だし」
友香は携帯電話を取りだし、田宮弁護士に依頼人の妻にも音の件を確認して欲しいと連絡をした。
「祥吾君ありがとう。T大学を目指しているのね。学部は？」
「はい、法学部です。でもどうして？」
「そりゃあ、本棚の参考書を見ればわかるわよ。私はT大の法学部の現役。三年生よ」
「ええっ、本当ですか」
「もし何かあったら連絡して。今日のお礼に相談にのるわ。お店に来て、コーヒーをご馳走するわ」
「ありがとうございます」
「私たちからもお願いします。この子は真面目すぎて根を詰めすぎるところがあります。息抜きにきょうまちに伺いますので少しお話相手になっていただければ」
友香は、喫茶きょうまちの電話番号と場所をメモに書き祥吾に渡すと外へと出た。
待ち合わせたかのように依頼人の自宅から田宮弁護士が出てきた。車に乗り込みバックミラーに映る依頼人と、被告人となるに十分な証言をした祥吾とその両親が三人の乗った車を見送った。そして、動き出した車に四人が揃って腰を折っているのがなんとも奇妙な光景に思えた。この後、それぞれはどんな会話をすることになるのだろう。殺人者の家族と殺人者におとし

める証言をした家族。これまでは親しげに挨拶を交わしていたに違いない。しかし、その日を境に真逆の白々さを放つ、大きく分厚い壁ができたに違いない。昼間の東京の町並みと首都高を照らし出すオレンジ色の街灯や自己主張の強いネオンが瞬く大都会の夜にも似ていると小田島が口にし、京町ビルへと車を走らせた。

「先生、どうでした大きな音について何か依頼人は言っていました？」

「依頼人も音が気になったと言っていたが門の外から聞こえたようだったので特に何かを確かめるには至らなかったそうだ。翌朝に家の前を見たが特に変わったことは無かったらしい」

「やはり大きな音は気のせいでは無く、実際に有ったのね…。先生、私は思うのですが、祥吾君がたまたま外を見たらお向かいさんが出かけるところだった。偶然では無く、大きな音によって計画的に造られた証言なのでは」

「自分も同感です。顔が判らないように門を閉めてコンビニの方向へ歩き出すのにはかなり無理のともなう姿勢での動作でした。だいたい、顔を見られないようにしてわざわざコンビニの防犯カメラにさらしますかね。防犯カメラを避けて自宅に戻ったにもかかわらずですよ」

「依頼人の話では、事件の起きる一週間ほどまえに被告人が泥酔して帰ってきたことがあったそうだ。営業という職務柄、酒をのんでも潰れることはこれまでには一度もなかったらしい。もっとも玄関に入って着替えを済ますといきなり緊張の糸が切れたみたいにリビングに座り込む事は何度もあったらしいがね」

「誰と呑んでいたんですかね？　接待か何か？」

「いや、接待では無かったらしい。タクシーで帰って玄関で大きな音と共に倒れ込んだみたいだ。誰かに送ってもらったと被告人が言っていたらしいものの誰かも判らないほどに酔っていたと言っている。門扉を閉めに依頼人が外に出たときにはすでにタクシーが走り出し、後部座席に誰かが乗っていたかどうかはわからなかったと言うことだ」

「どこのタクシーかは？」

「そこまではわからないが街灯に照らされた車は緑色で屋根の灯りは丸かったことは覚えていた」

「緑の車体と丸い車屋灯。明日、タクシー会社を当たってみましょう。直ぐに該当車両も運転手も判るでしょうから話を聞いてきます」

「さすがもと腕利きの刑事（でか）さん。たのもしいね」

田宮弁護士が感心するかのように口にした。
「ああ、よく覚えていますよ。たしか…工藤さん。そうそう、工藤さん。御徒町を流していたらたいそう酔っ払ったお客さんを無理矢理押し込んでメモを渡されて一万円札を気前よく。メモの住所を見て五千円もあれば足りると思えたので美味しい客だと思いましたよ。門にも工藤と表札が出ていたので難なく送り届けられましたよ」
「その時一緒だった人の顔は覚えていますか？」
「どうかな、あまり顔の正面をみて話していないから自信は無いな」
「何か特徴的なことは？」
「さあね」
「その時のメモは？」
「そんなのとっくに捨てちゃいましたよ」
「そうですか…じゃあ、何か思い出したらここに連絡をください」
確かなことは何もわからなかったが、状況は飲み込めた思いの小田島だった。
いつもの顔が田宮法律事務所に顔を揃えた。階下の喫茶きょうまちは、美沙子が一人で切り盛りをしてる。
「よしっ。これまでの調査で色々なことがわかった。疑わしいことが幾つか有るもののどれも確証にはいたっていない」
特に大きな進展もなく第一回目の公判を迎えるしかないと、田宮弁護士が力なく口にして解散となった。
「被告人には罪を悔い改めようという反省も無く懲役十八年を求刑したいと思います」
自信に満ちた論告求刑が公判検事によってなされた。
「弁護人の意見は？」
「弁護人としては被告人同様無罪を主張したいと思います」
工藤敏也が送検されて一ヶ月あまりして、第一回公判が開かれた。傍聴席には依頼人の妻と小田島そして智音が一番前に陣取っている。
「異議あり。弁護人の主張は確たる証拠もなく推論ばかりで単に本件審理を混乱させているだけに過ぎません」
田宮弁護士の意見陳述に検察官が疑問を呈した。
「弁護人は次回公判時までに立証できる事実のみを示す努力をしてください」
押されぎみでは有ったが被告人を簡単に有罪と決め付けるには問題も多く、さらに深めた審理が必要であるとの印象を裁判官に植え付けることができたと田宮

弁護士は確信を持った。
　次の公判には被告人が門を出る際の不自然さを立証し、真犯人が犯行を綿密に仕組み、さも依頼人が実行犯であるがごとく思わせた計画的な物であること。故に凶器の指紋は真犯人によって凶器を握らされたものであり、指紋の角度および回数の不自然さを客観的な意見として捜査を担当した鑑識班に裁判で証言してもらうことにした。同時に、誰が依頼人を泥酔するまで酒を呑ましたかを探し当てたいと田宮弁護士は考えた。できることなら凶器の出所までを探し当てたいと思ってはいたが困難をきわめることは十分に想像できた。
　翌日の昼に小田島はM商事の近くの公園に出向いた。弁護に伴う調査を始めてすでに六回目を数えた。案の定、顔なじみの女事務員が三人ベンチに腰を降ろし弁当を広げていた。
「そう言えば仙谷課長、事件の起きる一週間程前の出張は岐阜に独りで出かけたわね」
　どんな些細なことでもいい。事件とは何ら関係の無いことであっても普段と違う事は無かったかとの小田島の問いに女事務員が、「事件とは関係無いと思う」と、前置きをして仙谷課長の出張を口にした。
「独りで出かけるのは珍しいことなのですか？」
「ええ、出張は必ず二人って決めごとが・・・」
「独りだった理由は？」
「さあ？」
「それより仙谷課長も大変よね。事件が事件だけに。簡単に部長にもなれず、業績は下降・・・」
「でも工藤主任に課長になられるよりは良かったのかも」
「えっ、どういうこと？」
「工藤主任はやり手の営業マンだったから第二営業部を創設してその課長にって、亡くなった部長が」
「工藤主任と部長って仲が悪かったんじゃあ？」
　小田島がさらに詳しく聞きたいとばかりにあえて口を挟んだ。
「仕事ではいつもぶつかっていたけど実績は認められていたわよ。だから課長にって」
「そうなれば営業部の成績を造ってきた工藤主任が結果として抜けると仙谷課長の評価は下がるしかないわよね」
「そういえば部長、『君は社長のご機嫌取りがうまいだけが取り柄で、仕事は工藤主任や係長に寄りかかっているだけだ』って、部長室でやり込められているのが外にまで聞こえた時があったわ」

「やだ、聞き耳を立ててたの」
「そうじゃないわよ。それほど大きな声だったってことよ。おかげで報告書を届け損なって退社近くに持っていったら『遅い』って私まで怒られちゃったわよ」
「でも珍しいわね、あの部長がそんな大声で」
「そおなのよ。部長が声を荒げるのは工藤主任さんだけ。それだけ期待値が大きかったのよね。工藤主任さんもそこはよくわかっていたから、係長や課長に報告を済ませると『直談判してきます』って。誰でも知っているわよね。それなのに工藤主任さんが部長を・・・とても信じられない」
「社長の車が・・・。どこかへお出かけね。きっと仙谷課長が見送りに出てくるわよ」
聞き役に回っていたもう一方の女事務員が何気なく道路の向こうに目をやり話を変えた。
M商事と公園は道路を挟んで向き合っている。M商事の玄関先に黒塗りの高級車が横付けされると小田島は三人の女事務員に礼を述べると慌てて道路を渡り、植え込みに身を隠した。社長が車に乗り込み動き出すと同時に仙谷課長は深々と腰を折った。小田島はスマホのシャッターを何度も押した。そして、その足で緑色のタクシー会社を訪ね運転手の居所を聞き出した。
「うーん・・・。そんな気もするけど、違うかも。自信ないな」
小田島は当てが外れたと思うしか無かった。しかしどこかで真犯人は仙谷課長では？　と、思うようにもなっていた。翌朝から小田島は仙谷課長の自宅からM商事までの動線に柳刃包丁を買い求めることができる店はないかと歩き回った。
専門店、スーパー、ホームセンターと歩き回ったが凶器と同じメーカーの柳刃をここ二ヶ月ほどの間に売れたとの情報を得ることはできなかった。柳刃包丁そのものはそんなに売れる物ではない。ましてや多くの種類から凶器に使われた物と同じとなると年に数本との事らしい、もっとも専門店ともなれば別ではあったが、凶器の柳刃は安物の包丁であり専門店では扱っていなかった。
「確かに不自然さはあるが、推論でしかない。被告人の上司の仙谷課長真犯人説にしても小田島君の勘でしかない。もう少し何かが立証できなければとても無罪には無理がある」
「奥さんが『確かに自宅から一歩も出てはいない』と、これほど確かなアリバイ証言はないのに」
智音の顔がゆがんで見える。ベッキーが見たくはな

いとばかりに顔を伏せ目を閉じた。
「仕方がない。次の公判には鑑識課の長田巡査部長を弁護側の証人として出廷してもらおう。それと小田島君が聞き込んできた女事務員」
「検事の言っている殺人の動機を弱めるのと付着指紋の不自然さを突くのね」
「そうだね。どちらも決定打にはなり得ないが真犯人が他にいるかもしれないという心証を得ることはできると思う」
智音がすかさず田宮弁護士の手の内を読むと、田宮弁護士が第二回公判での方針を口にした。
「それではこれより第二回公判の審理を始めます」
裁判長の静かな宣言によって二回目の審理が始められた。
「長田巡査部長、鑑識歴はどれほどになりますか？」
「はい、十年以上になります」
「正確にはどれほどですか？」
「十三年と四ヶ月に入りました」
「そうですか。かなりのベテランですよね。率直にお尋ねします。今回の事件以外にも凶器に付いた指紋の鑑定は数多くやってこられたと思いますが、本件凶器の指紋の付着具合に違和感を感じることはありませんか？」
「はい、無いわけではありませんが・・・こういうこともあるのではと思っています」
「無いわけではない・・・。必然的でなかった言うことですね」
「異議あり。弁護人は自分の意見を証人に押しつけようとしています」
いきり立つかのように検察官が、すかさず裁判長に向って右手を挙げた。
「異議を認めます」
「弁護人。弁護人の質問の意図がわからないわけでは有りませんが言葉を選んで発言するように」
「わかりました。証人にもう一度お尋ねします。証人が感じた不自然さとはどんなことですか？」
「はい、先ずは握り具合が不思議でした。指紋の位置からすると刃が斜め、それもかなり斜めに握って犯行に及んだことになります。普通は真下か真上なのですが・・・」
「証人が感じた不自然さはそれだけですか？」
「いえ、握り直した痕跡が無かったのも不思議に思いました」
「それはどういうことですか」

「はい、凶器を箱から出した時、凶器を隠し持つ際、つまり懐なり鞄の中に入れる時、刃の部分が裸とも考えにくく、タオルなどで刃を巻いたときや凶行の際にタオルなどを取り除く際にも指紋が付いても不思議は無いのですが・・・」
「付いた指紋を拭き取った痕跡はありましたか」
「いえ、ありません」
「お忙しい中、証人はありがとうございました。今、お聞きの通り、凶器に指紋が付いても不思議の無いなかにおいて凶行に走る前に拭き取った痕跡も無い。かなり用意周到に取り扱った凶器であるにもかかわらずただ一度、被害者を突き刺すその一度だけ指紋が付いた。これほど不可解なことがあるでしょうか？　本来持たれるべき疑念が、目撃証言が出たことによって不問に伏されてしまった」
「異議あり。弁護人は自分の意見を押しつけようとしています」
　検察官が田宮弁護士の物意に憤慨するかのように唾を飛ばした。
「異議を認めます。弁護人は言葉を選んでください」
「失礼しました。いずれにしても疑問の解明をされることなく送検されてしまった。終ります」
「検察官、反対尋問を」
「証人、違和感は有ったがこういうこともあるかと証言されましたが、そんな事例があったということですか？」
「はい。四年ほど前になりますが・・・」
「ありがとうございました。質問を終わります」
　検察官は、長田巡査部長の事例を聞くこと無く質問を打ち切った。
「弁護人、次の証人尋問を」
　田宮弁護士は女事務員に被告人と被害者との日頃の人間関係を尋ねるべく証言台へと促した。
「証人、被害者と被告人工藤敏也との人間関係について証人の思ったままを述べてください」
「はい。事件を知って大変驚きました。工藤主任が服部部長を包丁で刺すなんて考えられませんでした」
「考えられない。どうして証人はそう思うのですか？」
「服部部長は工藤主任には厳しく接していましたが、工藤主任に対する期待感からであって憎しみが生まれるようなものでは無かったと思います」
「憎しみが生まれるような物では無かった？　それは仕事を遂行する上での上司から部下への叱咤激励的な物だったと？　けして殺意が芽生えるようなものには

感じられなかったと言うことですね？」
「はい」
「それは誰の目にも明らかでしたか？」
「それはわりません。かなり厳しく言い争うような時もありましたので・・・。でも工藤主任は言っていました。服部部長は、いつも最後は俺に任せると言ってくれるって」
「そうですか。あと一つ質問ですが、工藤主任がいつか服部部長を葬ってやるって口にすることがあった。と検事の取り調べ調書に記載があるのですが証人も聞いたことがありますか？」
「あります。でもそれは・・・殺してやるとは意味合いが違うと思います」
「証人にはどのように捉えられましたか」
「服部部長の叱責にグーの根も出せないような成果を上げて見せるんだと言っていましたから、そのことを指すのだと思います」
「ありがとうございました。以上で証人への質問を終わります」
　証人と、いくつかの質問を繰り返す田宮弁護士の口調は静かなものだった。それが功をそうし、女事務員は落ち着いた様子をたもちながら被告人を擁護する証言を終えた。
「検察官、反対尋問は？」
「服部部長と被告人との言い争いを好意的に見て取れたのは証人だけということはありませんか？　葬ってやるというのも証人がそう感じたにすぎない。証人が被告人に対し、好意を持って見ている。だからそうみえた。そういうことではないのですか？」
「異議あり。検察官は不当に証人に対し圧力を掛けていると思われます」
　今度は、田宮弁護士がいきり立った。
「異議を認めます。検察官は言葉を改めるように」
「質問を終わります」
　憮然とした表情で検察官は質問を打ち切った。
　第二回公判も決定打には欠けたものであっても、裁判官にもっと深い審議の必要性を認めさせる事はできたと田宮弁護士には確信が持てた。と、同時にこのままでは無罪を勝ち取ることはできない。逆転ホームランとは言わないまでもホームに生還できるほどの長打の必要性に駆られた。
　公判が終わるたびに、小田島の運転できょうまちに立ち寄り、奥のボックス席での反省会が行われた。
「奥さん、ご主人が泥酔して帰ってきた時の相手が誰

かを思いだしていただけるようご主人の記憶の紐解きをもう一度お願いします」
「凶器に指紋が付く機会はそれしかない。絶対そうよ」
友香がそれ以外には考えられないとばかりに口にした。
「でも不思議よね。泥酔した記憶さえないなんて。そんなことってあるの？」
智音は不思議そうに田宮弁護士と小田島の顔をのぞき込むかのような視線を投げた。
「確かに何軒ものはしごをして、どこで呑んでどこをどうやって帰ったかは思いだせなくても誰と呑んだかぐらいは覚えているもんだと思う」
「確かに。夕べ呑んだことさえも思い出せないなんて不思議でならないのだが…」
小田島の感想に田宮弁護士が同調した。
「翌朝、主人に問い質したんですが何も覚えていない。呑んで帰らなければならない理由さえ思い当たらないって…」
「いずれにしても次の公判までにはそこをハッキリとさせないと前には進めない」
田宮弁護士はそう言って押し黙るしかなかった。
「タクシーの運転手にもう一度当たってみます。それとタクシーに乗り込んだ辺りの呑み屋周辺の地取りをして、どこの店で誰と呑んでいたか突き止めてみせますよ」
田宮弁護士の思いに応えるかのように小田島が口にした。
「じゃあ、私はもう一度M商事の社員に聞き込みを」
「先生、私もおともします。酔って帰った日の退社時の様子を探り出すのでしょ」
田宮弁護士がM商事にと口にすると間髪入れず智音が張り切った。
「みなさん、宜しくお願いします」
工藤敏也の妻綾子は懇願するかのように深々と頭を下げた。
「さあ、今日はこれくらいにしてお開きにしよう」
「美沙子さーん、今日はもう良いわよ。後は私がするから」
友香は今夜の反省会が終わるのを見計らって小田切と共に帰るようにとカウンターに向って声を掛けた。
美沙子は毎日、友香とともに朝の六時半に店を開けてモーニングサービス目当ての客を受け入れている。きょうまちが次に忙しくなるのはお昼少し前から一時半までの間、コーヒーと軽食の対応に追われる。五時

を過ぎるころから三度目となる入り口ドアに付けられているカウベルが頻繁になり始める。が、ほとんどが待ち合わせのために訪れる客であり、注文はコーヒーかソフトドリンクのため来店数のわりには多忙を極めるといったことはない。七時を過ぎるとそれも無くなり、閉店の八時までは閑散としていた。店の営業時間は十三時間半と長いが、客への対応が忙しいのは五時間ほどであり、あとの時間帯は特別なことがない限り友香一人でも切り盛りは出来た。まれに智音や智音の友達がアルバイトとして美沙子や友香の代わりを務めることもあった。

一日の勤務時間は八時間と決めてはあったが厳格さなどもなく、タイムカードに類するものも無い。その日その日での都合による信頼で成り立っていた。手当も時給ではなく美沙子にとって少しでも有利であるようにと月給制とし、月単位における売り上げが一定のラインを越えるとお疲れ様手当を上乗せとしていた。

小田島の調査事務所の事務員をも兼務していた美沙子にはこの上ないほどの厚遇だった。もっとも調査事務所のデスクに小田島が腰を降ろすなどといった時間はほとんど皆無に近かった。外から帰ればきょうまちのカウンターに居場所を求め、事務仕事は奥のボックス席を定石としていた。そのつど口にするコーヒーはチケットでまかなうことによって一ヶ月当たりのきょうまちへの支払いは三万円も有れば十分に足りた。この支払いが結果的に家賃に代わる物であり、事務所の店賃も無く、事務所の維持に伴う光熱費だけが小田島の負担となっていた。

「五月二十三日の金曜日ですが工藤さんの退社時に誰かと一緒だったというようなことはありませんでしたか？」

田宮弁護士と智音はM商事の前の公園で弁当を広げていたいつもの三人連れの女事務員に話しかけた。

「えーっ、無理ですよ。四ヶ月近くも前のこと」

確かに無理があった。事件が起きてすでに三ヶ月以上が過ぎている。よほどのことでも無い限り記憶には残り得ない。田宮弁護士は、さらに遡っての出来事を聞き出そうとしているのだ。

「でもね、不思議なことがあった。珍しいーって。ほら、三人で帰りの電車の中で話していたじゃない」

「えっ、なんだっけ」

「ほら、帰りがけに仙谷課長が工藤主任にコーヒーを入れて渡していたことよ」

「ああ、そうそう。でも、あれって五月二十三日だっ

け？」
「いつだったなんてわから無いけど金曜日だったこと
は確かよ。その日は彼とのデート日だったから」
「そう、月に二回の遠距離デートの華金だったのね」
「それって、そんなに珍しいことだったの？」
　智音には不思議だった。コーヒーを入れるといった
些細な行為が記憶に残るほどのことなのだろうかと。
「ないない。絶対にない。仙谷課長の奥さんは恐妻家
で有名。お小遣いの使い方にも口を出すらしいって」
「しょうが無いわよ。社長の親戚筋の奥様だもの」
「だから、仕事に関係のないことで部下に気を使うな
んて絶対にない。例え百円だって使わないわね」
「そうよね。事務所に備え付けのコーヒーだって部員
の申し合わせで一杯ごとに百円を瓶の中に入れること
になっているのだから」
「その時、工藤さんは？」
「仙谷課長にお礼を言いながらそのまま手に持って帰
って行ったわ。多分、この公園を抜けてバス停の方へ」
「それから仙谷課長は？」
　この時点で智音の頭の中に、以前に小田島が口にし
ていた仙谷課長への疑念が芽生え始めていた。
「よくわからないけど、帰ったんじゃないかしら」
「ありがとう。お昼休みに申し訳ありませんでした」
　田宮弁護士と智音は、女事務員にお礼を述べると公
園に備えられた防犯カメラを探した。
「先生、あそこに」
　思ったとおり、公園の中には防犯用のカメラがあっ
た。この公園に幾つの防犯カメラが備えられているか
はわからないものの公園管理をしている区役所を訪ね
ればたやすい。確認すべき日時もわかっている。二人
はすぐさまタクシーに乗り込んだ。
「ちょっと待ってください…、五台ありますね」
　公園管理課の職員が台帳を見ながら口にした。
「五月二十三日の夕方六時から一時間ほどの記録を確
認したいのですが残っているでしょうか？」
「大丈夫です。一年は残すことになっていますので。
ちょっと待ってください課長の許可をもらってきます」
　本来ならば防犯カメラの映像を第三者が観ることな
ど許可されることはない。しかしそこは老練の田宮弁
護士。バッチを見せながら必死の形相で頼み込み職員
立ち会いということで許可された。
「先生、あった。ありました。仙谷課長が工藤さんを
押し込めるかのようにタクシーに乗り込んでいます」
「確かに。しかしこのタクシーは…」

依頼人の言っていた緑色のタクシーではない。仙谷課長が被告人を背負い、黒いタクシーの後部座席に下ろした後、押し込んでいるかのように写っていた。タクシー会社を当たればどこまで乗せたかは直ぐに調べがつく。

「ありがとうございました。この記録は後日裁判所から提出命令書が届くことになりますので大事に保管しておいてください」

区役所を出た二人は、そのままタクシー会社へと急いだ。乗せた日時はハッキリしているのだからその時の車も運転手も難なく判明する。二人を降ろした場所と時刻も記録を見れば明らかとなる。問題なのは運転手がその時の様子を覚えているかにかかっていた。

「覚えていますよ。若い方の客は酔っているのか眠っているのかぐったりしていましたね。もう一人の男性客の方は必死に介抱してるようでしたが不自然でしたね」

「不自然？　どんなふうに？」

「何やら一生懸命話しかけては一人でうなずいていましたね。一人芝居でも演じているようでした」

「その時の乗客の顔ですがこの二人に間違いないでしょうか？」

「こんな感じでしたがハッキリとは・・・」

「そうですか。ありがとうございました。裁判で証言台に立っていただくことになるかもしれませんがその時は宜しくお願いします」

「えっ、証言台に。刑事ドラマでしか観たことないのに俺が」

運転手は快く引き受けてくれた。もっとも正義感とはほど遠く「長い人生の中、一度くらいは経験してもいいかな」と、野次馬的ともとれる笑顔を見せながらのものだった。

「先生、退社時間とタクシーに乗り込んだ時間から公園ですでに泥酔していたとは考えづらいですね。それなのに被告はすでに自分の力で歩けないほどの状態だった。何があったんですかね？」

「多分、コーヒーに睡眠薬が入っていた。被告人はそれを知らずに飲んで、公園を抜ける前にベンチにへたり込んだ。それを計算の上で仙谷課長が追いかけタクシーでどこかに運んだ。そこで柳刃包丁を被告人に握らせ、さらに酒を多量に呑ませることで泥酔したかのように見せかけた。そして、改めてタクシーに押し込み自宅まで送らせた」

智音の疑問に応えるかのように田宮弁護士が推理を

した。
「そうですよね。うん、間違いない。すでに睡眠薬でもうろうとしていた。だからどこで誰と呑んで酔ったのかをまるで覚えていない。ましてや柳刃包丁を握らされたことなど記憶として存在しえなかった」
「これではまだ決定打にはならない。限りなく疑わしいに過ぎない」
　田宮弁護士は、さらなる裏付けと確証を得たいとばかりに眉間にしわを寄せた。
「こんなに疑わしいのに…任意で引っ張って白状させればいいだけなのに」
「おいおい、強引だな。智音君らしくないな。それが冤罪を産むことにつながっているのに」
　智音の焦れるかのような発言を田宮弁護士が諭した。
「そうでした。ごめんなさい。仙谷課長がどこで酒を呑まし、どこで凶器を手に入れたかがわかれば決まりなんですよね」
「そういうことだ。タクシーを降りて再びタクシーに乗り込むのに一時間半あまり。きっとタクシーを降りた場所から十分たらずの場所にちがいない。いやこの状態じゃあ五十メートル歩くのさえ厳しい。人目にだって付きやすい」
「小田島さんに早速このことを連絡します」
　その日の夕刻、きょうまちにいつものメンバーが顔を揃えた。
「タクシーから降りた目の前にカラオケ屋がありました。最初はあの辺りの飲み屋を当たっていたんですが智音さんからの連絡でもう一度、タクシーを降りた場所に立ってみたんです。酒と個室。これだって思いました。店員がよく覚えていまいした。男と女づれの場合はまれに女の人が担がれるように来店することがあるそうですが、男が男をしかも中年の男だったこともあって覚えていたそうです」
「それで、その二人連れの顔は…」
「写真を見せたら『多分この男だった』と証言してくれました」
「たぶんかー」
　田宮弁護士がため息を漏らした。裁判では、あやふやな証言は証拠としての効力がないことは誰もが知っていた。
「随分前ですからね。でも社員章はハッキリと覚えていました。M商事のバッチだったと」
「そおか」
　田宮弁護士はこれで突破口が開いたと顔に力が入る

と同時に微笑んだ。
「その時の様子も話してくれました。カラオケを楽しむというよりは、酒を呑むために来店したように見えたそうです。それもウイスキーをロックで何杯も」
「よっし。あとは凶器の入手先だ」
「先生、私の推理では独りで岐阜に出張したその日が怪しいと思うのですが」
智音がここしかないとばかりに口にした。
「自分も同感です。明日、岐阜にでかけようと思うのですが・・・」
「わかりました。ご苦労ですが小田島君、お願いします」
それから暫くして第三回目の公判が開かれた。傍聴席には友香と智音が一番前の席に陣取っている。
「証人にお尋ねします。五月二十三日の退社時間での出来事に付いてお話願います」
「はい、その日の退社時に限って珍しいことがありました」
「珍しいこと？」
「はい、仙谷課長が工藤主任に事務所に備え付けのコーヒーを手渡していたんです」
「それはそんなに珍しい出来事なんですか？」
「はい。コーヒーは百円を備え付けの瓶に入れないとだめなんです。仙谷課長の奥さんは恐妻家で有名で仙谷課長のお小遣いの管理も厳しく、誰かに何かをおごるなんて見たことがありません」
「被告はコーヒーを受け取ってどうしました？」
「裁判長。弁護人は本件審理となんら関係ない質問を繰り返し、審理を混乱させています」
検察官には、なぜここで仙谷課長の名前が登場するのかが理解できえなかった。
「弁護人、質問の趣旨を明確にしてください」
「はい。弁護人は被告人がかたくなに犯行を否認しているのは真犯人では無いからだと信じてやみません。真犯人は他にいる。そしてその真犯人をこの第三回公判での審理を通して明らかにしたいと考えております。そのために幾人かの証言者にご足労願っています。幾つかの証拠をも新たに用意しております。都度での提示をと考えております」
「わかりました。検察官の異議を却下します。弁護人は質問を続けてください」
「ありがとうございます。では証人、被告人はコーヒーを受け取ってどうしました？」
「はい、工藤主任はコーヒーを持ったまま会社を出て

公園を抜けていつものバス停の方へ歩いていきました」
「そうですか、公園を抜けて・・・。仙谷課長の方は？」
「仙谷課長については見ていませんのでわかりません」
「ありがとうございました」
田宮弁護士は女事務員に一礼をして裁判長の顔を見上げ一呼吸ついた。
「検察官、反対尋問をどうぞ」
「特にはありません」
「では、弁護人続けてください」
「今の証言によると被告人はコーヒーを持って公園に入った。入るまでに溢れるといけないので一口、二口は飲んだかもしれません。バスに乗るまでには全部飲むことに当然なります。飲んだことによってどうなったのか。ここに公園に備えられた防犯カメラの映像がありますので証拠として提出したいと考えます」
田宮弁護士は映像を係官に渡し、法廷内の壁に備え付けられたテレビ画面の方に視線を投げた。
「映像を観ていただいたとおり被告が誰かに背負われてタクシーに乗り込むところが写っています。被告を背負っているのは被告の上司、仙谷健吾です。画面左下に表示されている時間からいっても会社を出て二十分ほどであり泥酔しているとも考えられません。おそらくは睡眠薬を飲まされたのではと弁護人は考えています」
「異議あり。裁判長、私には弁護人が立証しようとしている趣旨がわかりません。本件とどうつながるのかが・・・無駄に時間を」
「検察官は弁護人の立証しようとしていることを先ずは全て聞いてから反対意見を述べてはどうでしょう。当法廷としては冤罪を防ぐうえにも弁護人の話を全て聞きたいと考えています」
「・・・」
検察官の異議に対し裁判長は言葉を制するかのように弁護人の話を聞きたいと口にしたことで検察官は言葉を失ったかのように椅子に音をたて、腰を落とすしかなかった。
「裁判長、タクシーに乗ったのは事件の起きる三日前のことです。その時の様子を聞くためにタクシーの運転手を証人として申請します」
「検察官？」
「然るべく」
裁判長は新たな証人を招くことへの同意を検察官に求めた。検察官は、憮然としながらも承諾するしかなかった。

「証人、二人の車内での様子を聞かせてください」
「はい、若い方のお客さんは意識がもうろうとしているようでした。もう一人の方のお客は若いお客に向かって話しかけているのですがまるで独り芝居をしているかのように見えました」
「何を話していたかを覚えていますか？」
「いえ、よくは覚えていませんが不自然さを感じたことはよく覚えています」
「タクシーを降りてどこに向かったかはわかりますか？」
「いえ、わかりません」
「ありがとうございました。証言によると被告の意識はもうろうとしており、誰とどこにどう行ったかも理解できていない状態だったと思われます。タクシーを降りてどこかに連れ込まれ、包丁を握らされても被告には全く記憶に残りえなかったと推察いたします。これが先の公判での鑑識課職員の証言にもあった不自然な握り方での指紋。それも握り直すことも無く一回だけ付いた指紋の謎の答えなのではないでしょうか」
「異議あり。弁護人は推論をあたかも真実であるかのように押しつけています」
「検察官の異議を却下します。検察官、反対尋問はありますか」
「ありません」
　検察官の顔は諦めたかのような顔色を漂わせ、田宮弁護士が推し進める審理を聞くしかないと椅子の背もたれに大きく体を預けるしかなかった。
「次に新たな証人を申請します。仙谷健吾が被告人を背負うようにして入ったカラオケ店の支配人です」
「検察官？」
「然るべく」
「証人、証人のカラオケ店の位置は？」
「御徒町の交差点のほど近いところです」
「御徒町交差点。被告人と仙谷健吾がタクシーを降りた目の前ですね。これなら大の男を背負うかのように歩いても人目に付くことなく店内へと入ることができますね。この二人ずれを見た印象はどうでしたか？」
「はい。男の二人ずれで、そのうちの一人の意識がもうろうとしているのはこれまでの来店客には有りませんでした。カップルならたまにはありましたけれど」
「その二人の男の顔は覚えていますか？」
「いえ、もう随分前ですから。でも赤いバッジでMとデザインされた社員章を付けていたのは覚えています」
「Mの赤い社員証。まさにM商事の社員章です。店内

での様子はどうでしたか？」
「特にカラオケを楽しむでもなく、何度もウイスキーの注文を頂きました。それもロックで」
「何度も？　それはどれほどの量ですか？」
「軽くボトル一本ほどの量でした」
「ボトル一本。被告はそれほどアルコールに強くはありません。ボトル一本ともなるとかなりの量であり、おまけに睡眠薬を飲まされており、一連のこうしたことが記憶から抜け落ちてもなんら不思議はありません。凶器に付いていた指紋の説明ができなかったことが頷けます」
「異議あり。弁護人は推論でウイスキーを被告人一人が呑んだかのように口にし、憶測でしかない睡眠薬をあらかじめ飲まされていたとの推論を展開しているに過ぎません。さらにその際に凶器を握らされたなどと。推論に推論を重ねています」
　検察官が再びいきり立った。ここで反撃をしないと裁判に負けることになる。汚点が付けられる事への危機感の表れともいえるほど力が込められた異議だった。
「異議を認めます。弁護人は立証できる真実のみを口にしてください。但し、推論ではあっても必然的と判断できることはかまいませんが、推論に推論を重ねることのないように」
「証人、ありがとうございました」
　田宮弁護士は裁判官に敬服の意味合いを込め、軽く頭を下げると質問を終えた。
「検察官、反対尋問はありますか？」
「いえ」
「裁判長、新たに証人を申請します。本公判の審理に欠かせない仙谷健吾を本法廷の外に待たせております」
「検察官？」
「然るべく」
　田宮弁護士は智音に視線を投げると智音が席を立ち、ドアから顔を出して外で待機している小田島に合図を送った。
「証人にお聞きします。証人の目からみて被告人と服部部長との関係はどのように見えましたか？」
「はい、工藤主任はよく私を飛び越えて服部部長に直談判をしていました。激しく言い争うこともしばしばで私が仲裁にはいることも珍しくはありませでした」
「それは、被告人が服部部長に対して殺意を覚えることもありうるほど激しいものでしたか？」
「どう捉えるかは人によって違うでしょうが、そんなこともあるかなとは思います」

「そうですか。服部部長は新しく営業二課を創設してその課長にと考えていたとの話がありましたが証人はご存じでしたか？」
「確かにありました。が、社長はそれほど乗り気では無かったと聞いております」
「そうですか。質問を変えます。証人から見て険悪の関係だった服部部長が工藤主任を一足飛びに課長に抜擢しようと思ったのはなぜでしょう？」
「さあ、私にはわかりません」
「証人が思うほど険悪な関係でなく、将来を期待しての叱咤であり、被告人にも服部部長の真意が伝わっていたからこそ遠慮無く意見をぶつけていたにすぎない。証人もそれがわかっていたんじゃありませんか？」
「異議あり。弁護人は自分の意見を証人に押しつけています」
　検察官にとって不利な方向へと公判が動き出している。これまで真実だと思っていたことが間違いであったと気付かされつつあった。それでも検察官としての務めは果たさなければとの思いが先に立った。
「異議を認めます。弁護人は質問を変えてください」
「わかりました。改めて証人に伺います。五月二十三日の退社時に証人は被告人に備え付けのコーヒーをご馳走したと聞いていますが事実ですか？」
「随分前のことで覚えてはいませんが、誰かがそう言うのであればそうでしょう」
「そうですか、記憶にないと・・・。ではその日、被告人とカラオケ店に行ったことは覚えていますか？　それも被告人の意識がもうろうとしているにもかかわらず」
「知りません。彼と二人でカラオケなど行ったことがありません。だ・だ・誰が、そんなでたらめを」
　検察官にも見て取れるほどに仙谷健吾は動揺を隠せないのか唇が震えだしている。
「証人、証人はここに立つ際に宣誓をしています。黙秘することはできますが嘘をつけば偽証罪に問われることに成りますよ」
　田宮弁護士の口調が厳しいものに変わった。
「もう一度聞きます。五月二十三日に被告人とカラオケ店に入りましたね」
「はい。日にちは覚えていませんが一度そんなことがあったような気がします」
「気がします・・・。まあいいでしょう。その時の被告の様子と、なぜカラオケ店に向かったのか話してください」
「仕事を終え、帰る際に公園のベンチに座り込んでい

る工藤君を見かけ、声を掛けたのですが激しい睡魔に襲われているようでしたので放っておくこともできずタクシーに乗せて自宅に送ろうと車を拾うと、盛んにカラオケに行こうとしつこく言うので仕方なく以前に行った事のある御徒町のカラオケ店に・・・」
「被告は激しい睡魔に襲われていた？　それにもかかわらずカラオケ店に行こうと・・・。なぜ睡魔に襲われていたのでしょう。声を掛けても覚めないくらいに・・・。不思議ですね。証人は疑問に思いませんでしたか？」
「確かにわたしもどうしたのかとは思いましたが・・・」
「思ったけれども確かめようとはしなかった。翌日に聞くことも出来たのに話題にもしなかった。まるで昨日のことは無かったかのように」
「異議あり。弁護人は自分の意見を証人に押しつけようとしています」
　検察官にもすでにことの真相がわかりかけていた。それでもあえて手を挙げるしかなかった。
「異議を認めます。弁護人は質問を変えてください」
「わかりました。改めて証人にききます。五月二十三日の退社時間に証人は被告にコーヒーをご馳走したと証言しましたがその中に睡眠導入剤が入っていたということはありませんか？」
「そんな、そんなことはありません。そんなことをしなければならない理由がありません」
「そうですか、証人は睡眠導入剤を処方してもらっていますよね。今日の午前、ご自宅を訪ね奥様から聞きました」
「確かに、仕事で疲れて眠れないときがよくありますので・・・でもそれは自分用であって工藤君に飲ませたなどと・・・絶対にありません」
　仙谷健吾の目はすでに浮遊していた。それでもキッパリと否定するしかなかった。
「そうですか・・・。話題を変えます。証人、カラオケ店でのことを少し教えてください。カラオケ店の支配人の話では特にカラオケを楽しむこともなくひたすらウイスキー、それもロックを注文していたとか」
「確かに。工藤君がカラオケに行こうと言い出したにもかかわらず歌うこともなく酔い潰れて」
「酔い潰れてどうしました？」
「どうって・・・それだけです。これ以上呑むとやばいと思い、タクシーを拾って自宅に送り届けるように運転手に」
「カラオケも楽しまずウイスキーを呑んだ、本当にそれだけですか？　本当は隠し持っていた柳刃包丁の柄

を被告に握らせた。いやそれが目的で、睡眠薬入りのコーヒーをおごり、カラオケ店に連れ込んだのではありませんか？」
「でたらめを言うな」
検察官が手を上げて『異議あり』と叫んだのと同時だった。仙谷健吾は動揺を隠すために法廷内の誰もが顔をしかめるほどに声を荒げ否定した。
「異議を認めます。弁護人は推論を重ねているだけに過ぎませんか」
「いえ、推論ではあるかも知れませんが新たな物証を示すことにより真相であると確信しています」
「新たな証拠？」
「はい。今一度、証人に質問したあとに提示したいと考えております」
「わかりました。弁護人は証人への質問を続けてください。検察官どうですか？」
「然るべく」
検察官はすでに諦めていた。真犯人は別にいたと。
「証人に改めてお尋ねします。五月二十二日岐阜への出張をしていますね。カラオケ店での出来事の前日です。出張記録も確認させて頂きました」
「確かに岐阜に行きました」
「なぜ今回の出張に限ってお独りでの出張だったのですか？　御社では原則二人での出張だと聞きましたが」
「特に意味はありません。たまたまその日での都合のつく者がいなかったので私が独りで出向くことに」
「日にちを変更することは考えなかったのですか」
「客先の都合もあり、客先より指定された日を変更することは商談に良い結果を産みませんので」
「そうですか、独りで出かけたのは客先の都合だと」
「そうです」
田宮弁護士が、これで仙谷健吾は落ちるしかないとの確信を得た瞬間だった。
「証人、何度も言いますが嘘はいけません。あなたはその日、岐阜の客先の前までは出かけたかも知れませんが客先への訪問は無かった。受付で確認しましたが、約束さえも存在していない。客先には証人が訪問した記録そのものが存在していないのです。担当者にも聞きましたが約束そのものしていないとのことでした。証人が経理に出した領収書は確かに岐阜までの旅客運賃の領収書であったことから岐阜には出かけましたね」
「・・・・」
「何しに岐阜に出かけたのですか？　取引先にほど近いホームセンターに柳刃包丁を買い求めるためにわざ

わざ出張と称して岐阜に出かけたんじゃないのですか」
「‥‥‥」
仙谷健吾はもはや押し黙るしか術がなかった。
「裁判長、ここにM商事の取引先にほど近い岐阜のホームセンターからお借りした防犯ビデオの映像がありますので証拠として提出したいのですが」
「検察官？」
裁判官が検察官への同意を求めたのと同時に仙谷健吾の顔から血の気が引き躰が震えだしたのがこの法廷にいる誰にも見て取れた。
「然るべく」
「弁護人、映像をこれに」
「ありがとうございます」
早々に映像が法廷内に映し出された。映像には日時と仙谷健吾が凶器に使われた柳刃包丁と同じ物を持ってレジに並んでいる姿が映し出されていた。
小田島が岐阜のホームセンターに当たりを付け、昔取った杵柄とばかりに映像記録を拝み倒して、持ち歩いているパソコンにコピーしたものだった。
仙谷健吾は証人台の後ろにへたり込んでうなだれるしかなかった。
田宮弁護士は畳みかけるかのように仙谷健吾に事件の全てに付いて自白を求めるかのように尋問を始めた。
もはや観念したかのよう仙谷健吾は、睡眠薬入りのコーヒーを被告に飲ませ、カラオケ店内で凶器に指紋を付けたこと。さらに、被告の玄関先で録音しておいた大きな音のテープを流し、向いの窓の向こうの受験生の気を引き顔を見られないようにしたうえで、会社のブルゾンを着込んで被告人であるかのように見せ、さらに念のためにコンビニの防犯カメラに写るように公園に向ったと。凶器は直ぐに見つかるように近くの植え込みに捨て、防犯カメラの無い道を選んで帰ったこと。そして最後に、服部昭雄に、被告人が会社を辞めたいと言っているので説得したいのだが同行してもらえないかと被告人の自宅近くの公園で待ち合わせたことなどを打ち明けた。動機は、被告人が課長になれば自分の影が薄くなり閑職へと追いやられる危険があり、恐妻家の妻にどんな罵りをうけるのかと恐れたことだったと。仙谷健吾は涙ながらに供述した。
全てが周到に練られた殺人計画だった。
「先生、やりましたね。これで工藤さんは無罪。冤罪が立証されたことになりますね」
第三回目の公判が終り、廊下へと出てきた田宮弁護士の手を小田島が握り裁判の成功を労った。

「よかった。ほっとしたよ。これもみんなが頑張ってくれた成果だ」
「ありがとうございました」
妻綾子は溢れる涙を拭くこともなく、夫が晴れて無罪となることに安堵しながら、心の底から湧き上がる喜びとともに深々と田宮弁護士に腰が折れんばかりに頭を下げた。
「それにしても仙谷健吾を外に待たせて裁判の様子をわからなくしておいて最後に証言台に立たせる作戦はみごとでしたね」
小田島が田宮弁護士の作戦を賞賛するかのように口にした。
「そんなことはない。誰でもそうするさ。前もって裁判での状況をしれば弁解をするための時間を与えてしまうことになる」
「そうですよね。本人は工藤さんの人となりを証言する積もりが、自分に対して証拠を突きつけられたんですから慌てたでしょうね。もはや、動揺を隠しきれずに観念するしかないですよね」
智音も田宮弁護士の弁解の時間を与えないという作戦に改めて勉強させてもらったとばかりに賞賛の笑みを送った。

それから二週間が過ぎて結審のための第四回目の公判が開かれた。
「主文、被告人は無罪」
証言台に立つ工藤敏也は弁護席で起立している田宮弁護士に一礼してから正面をむき直し、深々と裁判長に向かって頭を下げた。

了